

(論 文)

欧米との関わりで見る日本の近代化 (I)

松 原 正 道

キーワード

人間(中心)主義 合理主義 大航海時代 キリスト教 「天皇制」

序

筆者は、一昨年、昨年とロシア共和国オムスク市にあるドストエフスキー称号国立オムスク総合大学で、「欧米との関わりで見る日本の近代化」と言うテーマで講義をした。

併せて、農業大学では、「日本の農業とその問題点」として、「米」を中心とした農業について、日本人の米離れとそれに伴う食糧の自給(率)について話をすると共に、プーシキン¹の名を冠した図書館で「日本の現状」について講演をした。

それらでの質問ややりとりの中で、極東で兵役についていた学生から、「日本(人)はカニを始めとするロシアの魚介類を皆取(盗)っていつてしまう」と言う発言、同じく、極東で兵役の義務についている息子を慮る母親からの、「極東では危険なことはないのだろうか」と言う質問、一昨年のチェチェンでの紛争で若者が死んでいると言う事もあり、それらの質問に日本とロシアとの彼我の違いを感じさせられた。

そして、個人の力ではどうにもならないその「人間」が生まれ育った環境・風土、また、社会の体制の中でその「生きる」を送っている「人間」、その中で、人が好むと好まざるとに関わらずに兵役の義務につかなければならない「生きる」を送っている者、そして、その家族、そこには、予期せぬ「死」があるのであって、こうした事が、上の質問となったと言えるのだが、こうした質問をしなければならない者の「生きる」に筆者は思いを致したのである。

また、テレビやラジオのインタビューを受けたり、総合大学での「日本文化祭」に参加して、ロシア人の日本に対する関心の強さを感じさせられると共に、日本との交流の希望、そこには、大学同士のそれもあり、淑徳大学との交流が密になればとも思われた。

本研究ノートのテーマをオムスク大学での講義名と同じものとしたわけだが、イギリス近代史を学ぶ筆者ではあるが、自ら日本人であると言う事、日本の近代化にイギリスの与えた影響の大きさ、そして、近代化の延長線上にある現代に「生きる」を得ている者として、自分の「生きる」との関わりで重要な問題であり、これ迄もこれを考えてきた。従って、本研究ノートのテーマとするものである。

本論

I

「並んだ点を次々と通る。人が次々と仕事をへてきた、その跡」（漢字源）と言う「歴」の意から、これを、「その時々に関わった出来事」と言う事が出来る。そして、「ふびと。記録をつかさどった役目。歴史官」（同）を意味する「史」と言う言葉、これについては、「記録する。記録。記録する人。」と言えるだろう。

こうしたそれぞれに固有の意味を持つ文字を一つのものとして、我々は、一口に、「歴史」と言っているのだが、その点で、「歴史」とは、「その時々に関わった出来事と、その記録」と言いたいだろう。

この事から、「歴史」では、「起こった出来事」と「記録」とが不可分で、「起こった出来事」だけではなく、それを「記録」する事で以て意味を持ってくるのであり、いくら「起こった出来事」があっても、それが「記録」されなければ、その「起こった出来事」も、次々と起こる「起こった出来事」の中に埋没してしまい、忘れ去られてしまう事になるのである。その点で、「記録」の重要さが問題となってくることになる。

そして、それは、「調査、研究」と言う意味合いの強いHistoria、History、また、「記録する、記録」を意味するGeschichteと言う言葉となるのだが、多少の意味合いの違いがあるとしても、それぞれの言葉は「歴史」と訳されているのである。

「その時々に関わった出来事」を「歴」と言い、「その記録」を「史」と言った場合、「歴」に重点をおいて考えてみると、この世の中、宇宙の誕生以来起こっている天然・自然の「起こった出来事」もそこに含まれて来ることになるのだが、「記録」という「史」が介在してくると、その媒体となる「文字」の役割が大きな意味を持ってくる事になり、これを創出した「人間」の存在が強調されてくることになるのである。

その点から、『歴史』とは、『文字』を媒介とした『人間』の『生きるの積み重ね』と言う事が出来ると言えるのである。

この事によって、我々は、この世の中、宇宙の誕生から始まる天然・自然のその天文学的数字を持つ、また、「人類（間）」の誕生と言う200万年とか500万年と言う「時間」の長さから、「文字」が生み出された事と連動して始まる「四大文明」の発祥という約5,000年の年月の「人間」の「生きる」の「積み重ね」を考えれば良いと言う事になってくるのである。

従って、現在のところ、『歴史』とは、5,000年の『時間』と地球という『空間』と、そこに存在している『人間』を考える事である」と言う事が出来るのである。「現在のところ」と言うのは、今後、「人間」の活動の場が「地球」を超えた宇宙空間に至る事が考えられるからである⁽¹⁾。

「歴史」の主役をなす「人間」は、その「生（命）」を与えられた場所（地球）の自然や風土にその「生きる」を大きく規定されるのであって、それは、「人間」の外見を白・黒・黄色と大別している事で以て、その「生きる」場所（地域）の持っている影響力を顕著に見る事が出来るのである。

赤道に近い常夏の世界、夏は一日中太陽が沈まない白夜、冬は午後になると日が没する世界、夏は40度、50度となり、冬には氷点下40度、50度と100度にわたる温度差、一日の寒暖の差の大きい砂漠地帯、雨量の多い湿潤地帯、高地は高地の、低地は低地の気候・風土と「地球」は様々な様相を見せているが、それぞれにはそれぞれなりのその「生きる」を送っている「人間」がいるのである。

そして、それぞれの地域に「生(命)」を受けた者達は、その地に「生きる」事に順応し、中には、そこでの「生きる」に誇りを持っている者も少なからずいるのである。従って、そこにはそれぞれに相応しい「行動様式」(風俗・習慣)が形成されていくのである。

その点で、「人間」の「生きる」の姿は様々で、それぞれの地域、風土に根ざした特色を持った「行動様式」があり、それが長年持続される事で以て、それは、「伝統」として根づいていき、それを総合して「文化」と言うのである。

こうした「行動様式」(風俗・習慣)、「伝統」・「文化」は、暑い所は暑い所の、寒い所は寒い所の在り方、特殊性を示す事になると共に、それぞれの「文化」の特徴を示す事になるのだが、それが「歴史」に反映され、その複雑性を生むのである。

この「行動様式」(風俗・習慣)、「伝統」・「文化」の特色、特殊性とその違いを、我々は、日常生活の中での身近なものとして「食」と「言葉」とに特に顕著に見る事になり、それは、我々「人間」が母親の胎内で「生(命)」を得た時を以て、その「食」を通して、また、「語りかけ」によりその固有の「文化」を摺りこまれるのである。

「伝統」、「文化」に従った「食」、「言葉」に見る特色、偏りについて、日本人は他に類例を見ないとも言える「米」を主食とする「主食」と言う概念を持つ「行動様式」、「文化」を形づくって来たのである。それと共に、個人によっては終生変わる事のない「方言」、「訛」を持つ事にもなり、日本人は世界で最も難しいとされる「言葉」を当たり前のものとして使っているのである。

キリスト教的に言うならば、「人間」は他の生き物の「生(命)」を絶っても、自らの「生命(生きる)」を完うするためならば、それは、「神」に許された行為とされるのだが、従来、至極当たり前のものだった「食」が、近年、動物愛護の観点からこれを排除しようとする動きがあり、中国や朝鮮半島で行われそれを売りにして来た店もある犬肉を「食」とする習慣、また、古来、行われてきた我が国の捕鯨やイルカの捕獲等、これらは野蛮な「食」であるとか「種の保存」、資源保護の理由を以て、近年、活動家から攻撃を受けているのである。

その点で、活動家による強制は「神」による容認とどう整合するのか、そして、彼らが他の動物を殺してその肉を食べていないと言う保証はないので、その点をどう考えたら良いか疑問が残るところである。

現在、「自由化」の掛け声に伴って世界を席捲しているマクドナルドやケンタッキー・フライドチキン等のファスト・フードと言った「食」に見られる「食」の国際(貧困)化は、我が国にも波及、長年、「主食」として「さおり」とか「さおとめ(早乙女)」と言った言葉を生み出し、「神(々)」との関わりで尊重されてきていた「米」についても、食生活の変化を招来「米離れ」の現象をもたらし、それが政治の重要課題として浮上してきている現実があるのである。これを、「自然」とか「風土」との関わりで「生きる」を送ってきたそれぞれの民族の「行動様式」(風俗・習慣)、「伝統」・「文化」との関わりからどう考えたら良いのだろうか。

「自由経済」の原則に則り、それと一体化した政治力の強い民族や国民によりもたらされた国際(グローバル)化された現代社会にあって、特定の「文化」が他に波及、古来、それぞれの民族や国民が保持して来た「文化」を破壊しつつある傾向を、「食」の面ではマクドナルド、ケンタッキー・フライドチキン、コカコーラに見ると言えるのである。それも健康に良いと言うわけでもないにも関わらずにだ。

そして、「食べ物」の違いと共に、「食」の仕方も多様で、日本人は「箸」を主として使うが、欧米で見られるナイフとフォーク、民族によっては手で食べる事こそ正しい在り方とす

る者もいる。また、「食」と連動した排泄、そして、化粧は人に見せるものではなく、人前でこれを行う事は恥ずかしい事であるとする人々がいる一方、最近迄見られたと言う中国では他者から丸見えのトイレもあったと言われている風俗・習慣、「行動様式」を持った民族もいる。そして、左手を不浄とする人々もいるのである。

国際（グローバル）化はもう一つの「文化」、「言葉」（文字）の面でも見られるのであって、現在、世界の空港で共通語化している英語、これは第一次大戦で力をつけ、第二次大戦後覇権を握るようになったアメリカの政治力、経済力によるところが大であると言えるのである。

この傾向は今後も続くと言測されるのであるが、これは異民族同士が「言葉」による交流を容易にすると言う利便性がもたらされた事にもなる。

「バベルの塔」の崩壊後、「人間」は多様な「言葉」を使う事を余儀なくされ、国際（グローバル）化された現代社会にあっても、未だ、統一化された「言葉」（文字）はなく、「言葉」の壁は厚いものがある。だが、これが統一化されたとすれば、「歴史」の中では、日本が朝鮮半島で行った如く、一民族の覇権主義により古来続いて来た固有の「言葉」を蔑ろにして、統治者の「言葉」を強要する事にもなるのである。

その点では、ローマ時代の共通語ラテン語もローマ（帝国）の覇権によるもので、中世になってもその傾向は持続され、「近代化」の中で、相関関係を持つ「国民国家」の成立に伴って、次第にそれが薄れ、それぞれの地方語が定着、各国語が形づくられていくのである。

一方では、アラビア語の如く、交易の中で自然にイスラム教が広まる事によって国際語化した「言葉」もあるのである。

今日、観光を主要産業にしている地域、国において、世界各地からの観光客に対し、それを仕事にしている者達は老若男女を問わず、日本人と見れば日本語で、アメリカ人には英語で、ドイツ人にはドイツ語でと言うように、それぞれの「言葉」で対応している様を見て、「生きる」ための国際（グローバル）化を感じさせられるのである。

日本人は、立派な日本語があるにも関わらず、外国語、カタカナ語を使う傾向がある。それが、日本語で充分であると思える場面、場所、それも役所とか公共の場と言った所、例えば、ハロー・ワークと言った形で使われているのだが、それをどう日本語に訳し、外国語ではこれにあたる言葉は何と言うのかと考えさせられてしまう。

人々に親しみを持ってもらおうとの意図からではあるが、行政が自ら日本語を乱していると言えるし、「歴史」を正しく認識し、「日本固有の文化の尊重」を児童や生徒に教育する事が大事であるとして学校を指導している行政、それを担う政権与党が、国民の審判を仰ぐ政策、国民への約束を「マニフェスト」と言い、何か新しいものを掲げているかの様に見せているが、これ迄の「公約」とどう違うのだろう。野党も同様に「マニフェスト」を掲げていると言う点で考えさせられてしまうのである。「若い人の日本語の表現力がかなり落ちている。『リベンジ』ではなく、『復讐』ときちんと日本語を使えばいいじゃない」（ピーター・バラカン〈ブロードキャスター〉「国際化と日本」『朝日新聞』平成22年1月5日〈火〉）と言う一文があった。

「歴史の正しい認識」、「固有の文化の尊重」と言いながら、政治自らがこれを壊していると言えるのであって、そこに日本人の持つ「いいかげんさ」があり、何でも取り合えず受け入れると言う「融通無碍」な民族性があるとも言える。この「いいかげんさ」、「融通無碍」な民族性、これは、ある意味で日本人の持つ知恵とも言えるのであって、こうした民族性を持つての「日本の近代化」、これが本稿の主題とするところのものである。

カタカナ語は、将来においても「人間」が活用していく事になるコンピューターに関わる言葉に多く、これは外国語を日本語に、日本語を外国語に置き換える事の難しさを感じさせられると共に、「人間」が「生きる」ために必要な器具、機械の使用からこれも仕方がないのかと言う事も感じさせられるのである。

国際（グローバル）化による固有の「行動様式」（風俗・習慣）、「伝統」・「文化」の稀薄（破壊）化が進んでいる現代社会ではあるが、古来、それぞれの民族が保持して来た個別性、特殊性と言ったものの一方では、それぞれの時代、また、時の流れとは関わりなく、民族、地域、国を越えて「人間」として共通するもの、「理念」を希求して来たと言えるのである。

古来、「人間」は自らの存在、「我とは何か」、「人間とは如何なる存在か」と言う事を考え続けて来た。これに対しては、ターレス Thalēs（前624頃－前548／45）に始まるとされるギリシアの哲学者、バルダマーナ（マハービーラ）Mahāvīra（前600頃－前527）や釈迦 Śākya（前463頃－前383頃）等のインドの哲人、孔子 Kong-zi（前552／51－前479）、孟子 Meng-zi（前372頃－前289頃）に代表される中国の思想家等が多くの答えを導き出してくれているが、未だ、それで充分であるとは言いがたい。従って、この「命題」を追い、それを「考え続けていく」のが、「人間存在そのものである」と言う事になるとも言える。

「人間」、男と女の性の営みの結果として誕生した新しい「生（命）」、そこに、「我」の存在が始まるわけだが、物心がつく事によって、その「我」について思い悩み、苦悩の末自らの存在価値に意義を見出し得ずに、キリスト教的に言うならば「創造主」に反抗すると言う「罪」を犯して迄も、その「生きる」を自らの手で断ち切った者が数多くいたのである。

一方、自らの「生きる」に意義を見出し得た者の中には、それをどう完うするかについて模索し、その中から、「善」だとか「徳」だとかを考え、かつ、「自由」を考えるようにもなった。これについて、古来、多くの「人間」が模索、希求しており、その点で、この「自由」の追求の「積み重ね」こそが「歴史」そのものであるとも言える。

大別すると、天然・自然が我々「人間」の「自由」を制約・束縛しているとして、これらを自らの手で切り開く事により得られるものと、この天然・自然と一体化しながら得られる「自由」とに分ける事が出来ると言えるのであって、前者はどちらかと言えば欧米的発想であり、後者を東洋的、日本的な物の考え方と言う事が出来るのである。

「人間」が希求してきた「自由」の中で最も大きな障害となったものは、衣・食・住を始めとする「物（質）」の確保の難しさであり、特に、「食」の確保の難しさは「人間」に飢えの苦しみをもたらし、そのために多くの「生（命）」が失われ、また、数多くの争いを招来して来たのである。

それ故、「人間」の「歴史」を「『食』を巡る争いの積み重ね」と言う一面を現出、その争いに勝つために求められた「種（部）族の繁栄」が重要となり、建国間もないローマの人々が近隣のサビニー Savigny の女性を拉致したという話にある女性の確保も「争い」には重要な事柄だったのである。近代になると奴隷問題がアメリカに南北戦争をもたらすのだが、この奴隷の存在は、古来、単に労働力としてだけではなく、「家・種（部）族の繁栄」との関わり的一面もあったのだった。

「食」の確保の労働からの「解放」は長い間、「人間」にとっての至上命題で、古い時代には奴隷の活用、犠牲によってこれがなされ、「人間」は「自由」を得、「考える」ゆとりを持つに至ったと言っても過言ではない。この点に関しては、「現代」に「生きる」我々も、第二次大戦（太平洋＜大東亜＞戦争）とその後の時代にあって、「食」の確保の苦勞に縛られ、

「自由」を意識する「ゆとり」が乏しかった事の記憶は未だに残っているところであり、この時代、憲法に盛りこまれた「健康で文化的な生活」を含む「基本的人権の尊重」も、現実の生活を考えた場合、虚しく響く一面があったのである。

「食」の確保の苦勞の「解放」により、「人間」はこの時より「自由」を得る事が出来たとも言えるのだが、そのために如何に長い「時」の経過があった事だろう。と言いながらも、未だに、このために格闘している「人間」が数多くいる事を見過ごすことは出来ないのであって、それも、天然・自然の影響の一方では、人為的理由により「食」が溢れている所があるという反面、それが行き渡らないと言う現実もあるのである。

「食」の確保の「解放」なくしては、「人間」は「自由」を「考える」「ゆとり」も出て来ず、この「考える」事なくして「人間存在」の意味は薄らいでしまう。そして、「人間存在とは如何なるものか」と言う事を「考える」事なくしては、「真理」を探究する「学問」は成り立たないのである。

一方では、「生（命）」を与えられていながら、「食」の確保を始め苛酷な「生きる」を余儀なくされている者も沢山いるが、それは、それなりに自らの「存在意義」、「存在価値」を意識していると言えるのであり、そう言わなくては、「人間」としてその「生きる」を送っている者としてはつらいものがある。だが、現実は厳しい。

皮膚の色、体躯の違いがあるとは言え、「人間」と言う共通項が、「普遍」の概念を希求、これを生み出す事になり、これ迄の「歴史」では欧米の精神生活の基盤をなす「キリスト教」的思考を生み、これこそが「絶対」であるとしてきたのであり、その点で、これを他の「人間」に伝える事が、「神」の意志に添った行為であるとし、これを積極的に推し進め、時に、これに従わない者に「死」を以て購わさせる事もあり、その点では、「価値観の多様性」は認められないと言う側面があり、「一神教」の持つ狭量さが指摘される点でもある。

それは、「十字軍」の行動において、「反宗教改革運動」の在り方、また、宇宙の真理を探究しようとする者達への対応等に見られるのだった。日本では、かつて、この時代について「地理上の発見」と言う言葉を使っていたが、西欧的視点の強い表現であるとして「大航海時代」と言うようになった。この時代の「人間」の行動は「神」の意志に従ったもので、他の地域の人々にこれを伝える事を自らの「物欲」の充足とは別に、「使命」としていたところに重要な意味があり、その点で、正に、「地理上の発見」だったのである。そして、彼らが足を延ばし発見したそれらの地域の人々の悲劇が、そこから始まったのである。

「近代化」により世界に多大な影響を与えることになった価値観、物の考え方は「人間（中心）主義」Humanism、「合理主義」Rationalismであるのだが、それは、飽く迄も、西欧中心のものであり、交易を通し自然のうちにアジアに入って来たイスラム教とは異なり、プロテスタントに対抗したカトリックの「反宗教改革運動」により意図的にもたらされたキリスト教、彼らが「発見」した地域には沢山の「人間」が存在していたのである。そこには、古来、伝承されてきた価値観、風俗・習慣、伝統・文化、信仰が存在していたのだが、これらの人々は、自らが好むと好まざるとに関わらず、「神」を中心とした西欧的価値観を強制され、これに馴らされることになるのである。

こうした「歴史」の流れ、大勢の中で、我が国においては、ザビエルFrancisco de Yasu y Xavier (1506－52)によってこれが伝えられたのだが、古来、保持して来た日本的なものとの齟齬がその後随所に見られる事になり、国内的、国際的に様々な問題を生じさせる事になるのである。

II

歴史研究において、「近代化」が現象として具体化したのが、「大航海時代(地理上の発見)」Age of Great Navigations、「ルネサンス」Renaissance、「宗教改革」Reformationとされているのだが、これらは15世紀、16世紀を中心にして互いに連動して起こったものだったのである。

そこには、教皇を頂点としたローマ教会による統一的世界観とそれによる支配があり、「近代化」の現象は、これに対する抵抗とその打破を共通概念として持っていたと言うところに意味があったと言えるのであって、これらの具体的な歴史現象の根底に存し、それぞれに共通する要素が「人間(中心)主義」であり「合理主義」だったのである。

聖職者達が自らの立場を保持するために堅持してきた「神」、これに代わって「人間」の観点から物事を眺め、自らの「頭」で以て「考える」と言う事こそ「是」であるとし、これを「善」とするところに「近代化」があり、これを「進歩」、「発展」とするのである。

マルコ・ポーロ Marco Polo (1254-1324)⁽²⁾ によって伝えられたジパング(日本)の黄金を始めアジアの富を求めて、自らの「物欲」を満たすためにその「生きる」を賭け、アメリカ大陸発見の端緒をなしたサン・サルバドル San Salvador 島へ到着した、ポルトガルの東行策に対抗したスペインの後立てを得たコロンブス Christopher Columbus (1451?-1506) の西航(1492・8・3 パロス Paros 港発-10・12着)⁽³⁾。

トスカネリ Paolo dal Pozzo Toscanelli (1397-1482) 等による地球々体説とその長さが計算されていた時代、理論的にその可能性は知られていたとは言え、コロンブスはこれを自らの「頭」で「考え」、「信じる」に足るものであると「確信」、それに基づいて「行動する」事の判断を「自ら」の「考え」に従って下したところに、地球の果てに行くとな落の底に落ちるとしていた時代にあって、今流行りの言葉で言う「自己責任」に基づく行動に、コロンブスによる「人間(中心)主義」、「合理主義」を感じさせられるのである。

だが、その足跡はそこ迄で、未だ、地球々体説を彼自身は実感し得なかったが、後の冒険家の行動を促し、マゼラン Fernão de Magalhães (1480-1521)、ドレーク Sir Francis Drake (1543頃-1596) も仕極まり前の様に西航するのであって、そこに、「コロンブスの卵」の逸話が生まれる素地が存していたと言える⁽⁴⁾。

本人は航海の途中で、今日のフィリピンのマクタン Mactan 島で自らの「生きる」を守ろうとした土地の「人間」との争いでその「生きる」を閉ざされたマゼラン、その5隻の船団と265人の乗組み員が1519年9月20日にスペイン南部サンルカル・デ・バラメダ Sanlúcar de Barrameda 出発以来3年、1522年9月7日に1隻の船と17人の乗組み員が同地に戻って来た事で世界周航が達成、世界の歴史に地球が球体である事が実証されたのである。

しかし、彼らのアジアの富を手に入れたと言う「物欲」とキリスト教の「布教」と言う目的、これらは後に続く者達に託される事になるのである⁽⁵⁾。

時を同じくして、ミケランジェロ Michelangelo di Lodovico Buonarroti-Simoni (1475-1564) やボッチチェリ Sandro Botticelli (1444/5-1510) による「人間」の肉体、特に、その裸体を美の対象とする見方。その肉体の構造を見究めようと、禁断の人体解剖を行ったダ・ヴィンチ Leonardo da Vinci (1452-1519)⁽⁶⁾。

『デカメロン』Decameron(十日物語 1348-53頃)で「人間」の「生きる」を赤裸々に描いたボッカチオ Gioranni Boccaccio (1313-75)⁽⁷⁾。

ドミニコ会士 Dominican として教会の権威の中でその「生きる」を過ごしなが、コペル

ニクス Nicolaus Copernicus (1473－1543) に傾倒し、「神」の宇宙創造を認めつつも、絶えず生成衰滅している無限の宇宙の中に無限の世界があるとする世界・宇宙観を発表、異端として火刑に処されたブルーノ Giordano Bruno (1548－1600)。

最後はカルヴァン Calvin 派に改宗していた彼に多大な影響を与え、『天体の回転について』De revolutionibus orbium coelestium (53 公刊) でキリスト教的世界・宇宙観に「コペルニクスの展開」を求め、古典、医学、経済学にも通じた当代一流の学者のコペルニクスはポーランド北部のフロンボルク Huronborg の聖堂参事職だったため自説の発表には慎重で、その主著の公刊も死の床にあっての事だったのだが、ガリレイ Galileo Galilei (1564－1642)、ニュートン Sir Isaac Newton (1642－1727) 等にも影響を与え、近代科学の泰斗としての役割を果たした様に、教会の権威・秩序の中にその「生きる」を得た者の中にも、「人間(中心)主義」、「合理主義」の立場から、これ迄の価値観に疑問を呈する者が現れていたのである。

こうした時代の流れに従い自説を『天文対話』(1630) 等で発表したガリレイは、未だ、権威主義を残していた教会の判定に、自説を覆し、これに従わざるを得なかったのである⁽⁸⁾。

こうした学問・研究の立場から教会の権威に抵抗した者とは別に、信仰面でこれに対した者も多く、そのために火刑に処せられたフス Jan Hus (1370 頃－1415)、サボナローラ Girolamo Savonarola (1452－98) 等。そうした中で死んだ後に遺体を掘り返されて改めて火刑にされたウィクリフ John Wycliffe (1330 頃－84) の様な者もいたのである。

その点で、教会も自らの立場を保持するために必死だったと言えるのだが、そこには、「愛」や「寛容」を説く姿は感じられないのである。

「巡礼」Pilgrimage と共に信仰の篤さを計る「贖宥状」Indulgence、これの乱発、そこには、ルネサンスの天才達の作品の購入によって窮迫した教会の財政事情が深く関わっていたのだが、「95ヶ条の提題」95 Thesen (1517) を以て教会に疑問を呈したのを契機として、信仰とは、「聖書」を媒介とした「神」と「我れ」との関係であるとするルター Martin Luther (1483－1546) にとって、カトリック Catholic 教徒のザクセン Sachsen 公フリードリヒ 3 世 Friedrich III 賢公 der Weise (1463－1525) の庇護は大きい⁽⁹⁾。

「宗教改革」とは言うもののルターの処置を教皇レオ Leo 10 世 (1475－1521 在位 1513－) に託された神聖ローマ皇帝 Karl 5 世 (1500－58、スペイン王カルロス 1 世 <1516－56>、神聖ローマ皇帝 <19－56>) と七選帝侯 Kurfürsten の有力者フリードリヒとの力関係がそこに働いていたと言う政治を見逃す事は出来ない。

ジュネーヴ Genève を拠点とし、聖書こそ唯一の真理の啓示であると『キリスト教綱要』Christianae religionis institutio (1559) を著わし、神の主権と自由、信仰における平等、個人主義を鼓吹、人民主権を説くと共に、利潤追求を積極的に肯定したため新興の市民階級に受け入れられ、資本主義の精神的基盤を形成、ピューリタン Puritan の活動の支えとなったフランス生まれのカルヴァン Jean Calvin (1509－64)。

- 8 社会主義、共産主義を生む素地をなす活動のためルターと決別し、後に、「農民戦争」Bauernkrieg と合流、その過激さを嫌った旧勢力によって処刑されたミュンツァー (1490?－1525) 等による宗教改革運動⁽¹⁰⁾。

これらの動きが「歴史現象」として現れる事により「近代化」が始まったとするので、こうした時代を画した者達の行動には「運命 Fortuna とは自らが切り開くものである」とするマキアヴェリ Niccolò di Bernado dei Machiavelli (1469－1527) の考え方を感じさせられるのである。

こうした「人間（中心）主義」、「合理主義」の発揚は、18世紀、19世紀になると、「物（質）」に力点が置かれ、「産業革命」Industrial Revolutionと言う形を以て更なる発展を遂げるのである⁽¹¹⁾。

「良い物」を「安く」、「早く」、そして、「より沢山」手に入れたいと言う「人間」の「物欲」を充足させるために、機械の発明・改良がなされ、これに呼応し、動力源として古来活用してきた人力を始めとした動物、風、水等自然の力に代わって、蒸気の力を以てこれ迄とは比較にならない「力」（エネルギー Energy）を「人間」は創り出すのだった。

それは、イギリスに「産業革命」をもたらす契機となった綿紡績を始めとする機械の動力源となる一方、蒸気機関車、蒸気船に転用され、大量運搬に資し、「産業革命」を助長すると共に、川べり等に作られていた工場が物資の運搬に便利な場所へと変わっていったのである。

これにより、「人間」の「物欲」を充足させる大量生産、大量消費が可能となり、それにより、「人間」は「物質文明」と、それをもたらす「機械文明」を享受する事になったのである。

だが、それは、「産業革命」を生む契機となったインド産の綿織物の快適さ、これを国内で賄おうとしたため、古来、家内制手工業を以て主産業として来たインドを、単なる原料供給地、イギリスの植民地へと墮さしめたとする様に、「産業革命」はこれ迄の世界の経済を大きく変え、それに伴って政治をも変えるのだった。

ポルトガル、スペインから始まった西欧の海外進出は、やがて、イギリス（1600）、オランダ（1602）、フランス（1608）による「東インド会社」East India Companyの設立とその活動に取って代われ、更に、国家的事業としてアジアに確固たる地歩を築き、20世紀になるとアフリカ分割をも完了。

プロテスタントがカトリックを追う形で大陸横断国家を建設したアメリカが太平洋に進出、ハワイHawaiiを領有（1898）、スペインに代わってフィリピンを植民地とし（1902）、インド、マレー半島、香港を拠点としたイギリス、インドシナ半島を領有したフランス、インドネシアのオランダ等列強のアジア進出は清朝の中国に租界を設け植民地化し、幕末期、維新後の我が国に脅威を与えるのだった。

これとは別に、不凍港を求め南下策、東進策をとるロシアが老大国化しつつあるトルコとの間に度々紛争を起こし、列強に刺激を与えると共に中国に進出し日本を緊張させるのだった。

19世紀半ばに統一を果たしたイタリア（1861）、ドイツ（1871）が列強に伍し権益拡大を計ろうとして20世紀の国際情勢は複雑さを増すのである。

対外進出を活発に行う列強による開国の圧力に抗し得ず、徳川（江戸）幕府の下、嘉永7（1854）年に「日米和親条約」を以て開国した日本は、「明治維新」（1868）を経て近代国家への道を進む事になり、維新とその後の時代を担った者達は新生日本の目標を欧米化する事であるとし、「物質文明」、「機械文明」を摂取する事による「富国強兵」を掲げ、列強に追いつく事を至上命題としたのである。

9

19世紀、20世紀の列強による帝国主義の高まりに抗し得ず開国、西洋文明に接する事になった日本ではあるが、それは、既に、16世紀に「人間（中心）主義」、「合理主義」に根ざした西洋文明、特に、ポルトガル、スペインのそれに接した時から始まっていたのであり、それをもたらしたのがザビエルだったのである。

「大航海時代（地理上の発見）」の波に乗り、「反宗教改革運動」の先兵として彼が天文18（1549）年7月3日鹿兒島に上陸したのを機に日本は、「人間（中心）主義」、「合理主義（精神）」

を背景とした「西洋文明」に接する事になるのである。もっとも、天文2（43）年に種子島に漂着したポルトガル人によって、マカオ Macau 製と言われる鉄砲が伝えられてはいたのである。

スペイン北部ナヴァーラ Navara の城主の三男ザビエルは、政争の時、城の攻撃軍の指揮官だったロヨラ Ignatius de Loyola（1491－1556）とパリ遊学中に邂逅、その感化で同志6人と厳格な軍隊の規律を以て、教皇の至上権の再確認、宗教改革運動で失われた教会の権威の回復を掲げてイエズス Jesus（ジェスイット、ヤソ）会を設立（40）、布教に携わるのだった^{（12）}。

海外進出に積極的だったポルトガル王ジョアン João 3 世（1502－57 在位 1521－）の要請に従い東インドへの布教に従事、その際利用した船は、「全長約50メートル、3人がかりのオール50挺で最大時速7.5ノットで走る“浮かぶ砲台”といわれた戦艦である。植民地支配のためにはこうした武力を配置することも必要だった」（古川薫『ザビエルの謎』文春文庫 1997 60頁）と言われるもので、ここに「神」の教えを広める事を「使命」とするザビエルの持つ一面を窺い知るのである。

そして、「ザビエルが、個人としては謙遜で、控えめでありながら、異教徒に対して無意識のうちに優越感を持っていたことはどう見ても残念な事である。キリスト教徒として、また、ヨーロッパ人として、彼は自分が正しくアジア人と異教徒はまちがっていると確信していた。ユダヤ教徒やイスラム教徒は言うに及ばず、ヒンズー教徒も仏教徒も人間として犯しがたい価値があり、神の恵みの道を相携えて歩んでいるということを認めようとせず、異教徒は偶像崇拜と迷信のわなにかかっている者で、つまり悪魔^{わさ}の業だと思っていた」（ミルワード松本たま訳『ザビエルの見た日本』講談社 1999 165頁）との指摘から、こうした要素を彼が持っていたと言う事と、ここにキリスト教の持つ本質があったとも言えるのである。

1542年5月、ポルトガルのアジアにおける拠点、インド西岸のゴア Goa に到着、ここを足場に、同じくポルトガルの拠点だったマレー半島西岸のマラッカ Malacca を中心に東南アジア各地、香料諸島と言われるモルッカ Molucca 諸島に赴きアンボン（アンボイナ）Ambon 島や周辺の島々で布教活動を行うのだった。

そうした中、マラッカで殺人で同地に逃れ彼が授洗した日本人アンジロウ（弥次郎 生没年不詳）に会い日本布教を決意、ゴアで準備の後、アンジロウを案内に1549年4月に発ち、マラッカを経て日本への途についたのだった。

「民衆への布教は、僧侶たちの墮落した私生活を激しく非難することのほうが、仏教の偶像崇拜などに対する論理的な攻撃よりも効果的だったのかもしれない。いずれにしても生涯不犯を神に誓って禁欲生活をおくっている神父たちにとっては、一夫多妻とか男色などの性風俗が、特別不愉快にうつるのである」（古川 前掲書 40頁）との指摘の如く日本の風俗・習慣、また、仏僧の一部に見られるその在り方には宗教改革運動により頹勢を強いられたローマ（カトリック）教会が挽回を期し、内部の粛清を計る中から誕生した教団に生きる彼には理解し難いものであり、攻撃的のとしたと言う事は分かる。

2年余りの滞在中、平戸、山口、京都等で500人以上の人間に授洗したと伝えられ、鎖国中の中国での布教を考えて渡航、機会を窺うが、広東港外の上川島で死ぬ。46歳だった。

ゴアに始まりマラッカ、アンボン島、日本、中国等と彼の足跡は広いが、それぞれの地で滞在は短く、生涯を一ヶ所に賭けた者もいる中でこれをどう考えたら良いだろうか。こうした彼は、後に、カトリックの規範で聖人に列せられるのだが、「1814年5月21日付の勅令により廃止されるまではほぼ250年も設置されていたこの異端審問所で4,046名が有罪を宣告

され、そのうち火炙りの刑の宣告を受けた者は121名にのぼったと言われているのである」(徳永恂・小岸昭『インド・ユダヤ人の光と闇』新曜社 2005 70頁)と言うゴアの異端審問所について、「このザビエルの提言から14年後の1560年、ゴアの審問所が設置される」(同上書 69頁)と指摘されると共に、「インド洋制海権をほぼ手中におさめたポルトガルは、錦の御旗として掲げたキリスト教普遍主義を貫徹するために、東洋の離散地^{ディアスポラ}においてさえも、このような最初のユダヤ人犠牲者を火炙りにする必要があった。そして『インドの使徒』フランシスコ・ザビエルもまた、聖なるカトリック信仰に背いたマラーノに対するむごたらしい刑の執行にいささかも疑いをもたないキリスト教絶対主義者の一人だったのだ」(同上書 64-5頁)と、また、「この時のザビエルの動きを伝えるシュールハンマーの一文は、ゴアの司教のみならず、『インドの使徒』ザビエルの、異端抹殺に直接繋がってゆくキリスト教普遍主義のイデオロギーを示すものとして特に注目に値する」(同上書 59頁)と言う指摘にザビエルの持つ一面を垣間見ると共に、当時のローマ(カトリック)教会の在り方を知るのである。

ザビエルが去った後、インドで彼に会いイエズス会士となり、共に来日したスペイン生まれのトレス Cosme de Torres (1497-1570<元亀1>)が日本布教長として、山口を中心に活動、5年間に武士を含む約2,000名の信者を得たが、山口内乱(天文20<51>)のため府内(大分)に移り、救貧事業に携わった後、全国布教に従事、京都開教にも努力するのだった。

2代目布教長のポルトガル人カブラル Francisco Cabral (1528-1609)は日本に馴染まなかったが、戦国大名を貿易などで懐柔し布教に利しようとしたのだが、キリシタン発展(史)に多大な影響を与えたイタリア出身の東洋巡察師バリニャーノ Alessandro Valignano (1537頃-1606)が日本布教区を準管区に最格させるにあたり、ポルトガル生まれのコエリョ Gaspar Coelho (1527/31-90)を任じたため対立、マカオへ転出するのだった。

カブラルを転出させる事になったコエリョは、天亀2(71)年に来日、主として九州で布教にあたっていたが、日本が準管区になる事で初代の準(副)管区長となり(天正9<81>)、大坂城で豊臣秀吉に謁見、その九州征討や大陸進行計画への支援をほのめかす等政治的関わりを示すと共に、後に、伴天連追放令が出ると、多くの反対をおして長崎を武装して教会領を守ろうと計画する等その姿勢は日本におけるキリスト教を守ると言う事によるとは言え、政治色の強いものだったと言える。こうした彼の言動を時の為政者秀吉はどう見たのだろうか。教皇ユリウス Julius 2世 (1443-1513 在位1503-)が教会軍を率いて陣頭に立ったと言う事は有名な話ではある。

コエリョを初代準(副)管区長に据え、「天正遣欧少年使節団」を手配する等、日本におけるキリスト教布教に多大な働きをしたバリニャーノの積極的な行動を秀吉はどう捉えていただろう。

彼らに先立ち弘治2(56)年、ゴアから豊後に到着、平戸付近で布教に携わった後、京都に赴き極貧と戦いながら布教に尽し、永禄2(59)年、將軍足利義輝に謁見して布教許可を得、主に、畿内で活動、堺をその拠点として結城氏、高山氏と言った有力者の改宗に尽力、『耶蘇会士日本通信』にその書簡が収められているポルトガル人のビレラ Gaspar Vilela (1525頃-72)。

ポルトガルの貴族で貿易のために度々来日、1556年の渡航でイエズス会士となり、外科の素養を以て豊後府内に日本最初の洋式病院、また、孤兒院を開設、西洋医学(南蛮外科)を伝え、九州を中心に伝道し天草に没したリスボン Lisbon (Lisboa) 生まれのアルメイダ

Luis de Almeida (1525－83〈天正3〉) 等がいたのである⁽¹³⁾。

そうした中、ザビエルやアンジロウの影響を受けて来日したリスボン生まれのフロイス Luis Frois (1532－97〈慶長2〉) が九州、京畿地方で布教に従事するのだった⁽¹⁴⁾。

「応仁の乱」(応仁1〈1467〉－文明9〈77〉)等室町幕府の衰退は群雄が割拠する「戦国時代」を招来し、織田信長(天文3〈1534〉－天正10〈82〉)が将軍足利義昭(天文6〈1537〉－慶長2〈97〉)を廃し(天正1〈73〉)、安土城を造営(天正7〈79〉)、安土・桃山時代(文化)の基礎を固め、キリシタン(西欧)文化をも摂取して天下統一を目指して鉄砲を始めとした西洋の文物を積極的に取り入れ自らの力とし、そのため、それをもたらず宣教師達をも優遇したため、京都や安土では南蛮寺(教会)やセミナリオ Seminario(学校)、コレジオ Collegio(高等教育施設)等が建設され布教活動が活発に行われるのだった。

安土城建設にあたって仏像を階段の敷石に使ったと言われ、「叡山焼打ち」に見られる仏僧に対する嫌悪を持っていたと言う事から、これに対抗する意味もあってか宣教師を厚遇、フロイスも信長の保護を受け、その面前で、足利義輝の使僧として大友、毛利両氏の争いを調停、足利義昭を奉じた信長に登用され、皇居造営の大工奉行を勤め、その政務に参与した法華僧朝山日乗(?－天正5〈75〉)を論破するのだった。そして、天正9(81)年には越前北庄に高山飛弾守(右近)を訪ねてもいるのである。

その後、天正14(86)年、準(副)管区長コエリヨに随行して各地を巡り、大坂で豊臣秀吉の歓待を受けるのだったが、コエリヨにしてもフロイスにしても、秀吉による「伴天連追放」に伴う難局に対処せざるを得なくなり、フロイスは慶長1(96)年暮れの「長崎二十六聖人殉教」を目撃、それを通信として送り(『耶穌会士日本通信』)、『日本史』Historia de Iapamや『日欧文化比較』の著述を残しているのである。

イタリアの貴族の家に生まれ、イエズス会の東洋巡察師としてゴアに赴任、次いでマカオに行き中国の布教に努めた後、天正7(79)年、日本巡察師として島原に上陸、九州、近畿で布教、信長に謁見、安土にセミナリオ、コレジオを創設、日本におけるキリスト教布教に資したバリニャーノは、九州のキリシタン大名、大友義鎮(宗麟)(享禄3〈1530〉－天正5〈87〉)、大村忠純(天文2〈13〉－天正15〈87〉)、有馬晴信(永禄10〈67〉－慶長17〈1612〉)にすすめて「天正遣欧使節」をローマに送るのだった⁽¹⁵⁾。

13歳の伊東満所(元亀1〈70〉?－慶長17〈1612〉)を正使に、14歳の千々石ミゲル(永禄11〈68〉－?)を副使とし、随員に中浦ジュリアン(永禄11〈68〉－寛永10〈1633〉)、原マルチノ(生年没年不詳)を据え、天正10(82)年2月バリニャーノに引率されてポルトガル船で長崎を出発。マカオ滞在後インドに向かい、バリニャーノはここで下船、ロドリゲス Nonius Rodericusが引率して喜望峰を経て、天正12(84)年8月11日にリスボンに到着、14日にはポルトガル王位を兼ねていたスペイン王フェリペFelipe 2世(1527－98 在位56－ポルトガル王位80－)と謁見。

12 天正13(85)年3月22日ローマに入った一行は翌23日教皇グレゴリウスGregorius13世(1502－85 在位72－)に三大名からの書簡と贈り物を献じ、滞欧中はその態度の立派さもあって、ローマ市民権を与えられる等厚遇され、日本におけるセミナリオへの教皇の援助をも得たのである。

同18(90)年7月21日、帰国し、翌19年3月3日、ゴアから同行したバリニャーノと共に聚楽第で天下人となっていた秀吉に謁見し、その報告をするのだった。これを心好く聞いていたと伝えられているのだが、この時の秀吉は既にかつての彼ではなくなっていたのである。

天正15(87)年5月の九州平定に際し、キリスト教の勢いが盛んな事を知り、これを国内統一の妨げになるとして同年6月19日に博多で「伴天連追放令」を発令、神国・仏教国の日本でのキリスト教の布教は不適當であるとして、20日間以内に国外に退去せよと命じていたのである⁽¹⁶⁾。

だが、貿易を維持しようとして商人の渡航は禁じておらず、「追放令」も徹底しない側面があり、そこに秀吉の考え、およびその置かれている立場があった事が知れるのだが、彼にはキリスト教(キリシタン)の持つ本質と自ら天下統一に対してのそれが持つ意味を見極めるものがあつたと言えるのである。

ユダヤ教以来の唯一神信仰を基礎に、イエスを真の神、真の人とし、「父」と「子」と「聖霊」を一体化した「三位一体」Trinity説をその根元に据えている教えと、古来、日本で培われてきた風俗・習慣、伝統・文化、それに伴った信仰との間に、キリスト教が融合し得るかと言う事になると、それが持っている本質が余りにも厳密であるがため、融通無碍の範中に収まり切れないものがあつたと言えるのではなかろうか。

その行動様式、風俗・習慣、伝統・文化の中に、時に、信仰として、我々日本人は、古来、建国伝説(神話)と結びついて、その中から生まれた天照大神を祖神とし、神武天皇を初代天皇とする、4世紀頃に渡来した儒教と6世紀中頃に伝来した仏教と言った中国からの思考を綱い交ぜにした「天皇」の存在(天皇制)を、多少の色合いの違いはあるものの国(日本)の在り方の基本に据えて来ていたのである。

その時々の方勢の違いによって多少の違いはあるものの、日本人の「生きる」には、常に、その根底に「天皇」が介在して来ているのである。それが、人々の日常において、どれだけ実感し得るか否かを別にして。

従って、為政者にとってこれを蔑ろにする事は難しいのであって、秀吉自身もそうであるが、源平の対立を経て源頼朝(久安3<1147>—建久10<99>)が政権を担当して以来、武家による政権の時代が現出し、それは江戸幕府が崩壊する迄続き、その間、武家の棟梁達は、政治の実権は握ってはいるものの、常に、自らの地位・立場(称号)は、神(々)に連なる天皇の権威によって裏付けられているものであると言う事を意識しているのだった。

従って、政権を担った武家の棟梁達はそれぞれ、その力が自らのそれを越えない事を配慮しつつも、常に、「天皇」に敬意を払うと言う形をとり、自らの地位・立場、力は天皇の権威に基づいて成り立っているのだと言う事を、時に、周囲に認識させる事が重要で、「天皇」から与えられた征夷大將軍、摂政、関白と言った呼称を以てその正当性を主張すると共に権威づけをするのである。

そう言いながらも、その時々棟梁達は「天皇」の権威を利用しつつも、その力が余り強くなならない様にも配慮するのであって、そのためには、「天皇」の側近の者達、それが、皇子であっても幽閉したり密殺する事で「天皇」の力を削ぐ事に腐心するのだった。だが、しかし、「天皇制」を廃止しようとはしなかったのである。

13

そのために、今日に至る迄、「万世一系」と言われている「天皇制」が存続しているのである。その点では、諸外国、近くは中国に見られる「革命(思想)」は、これ迄、日本人の考え、その歴史の中には見られなかったのである。

その点は、現在、施行されている「日本国憲法」でも、その第一条に「天皇制」が規定されており、その憲法を基盤にした諸法律を以て我々日本人の「生きる」が営まれているのであって、最近見られるようになった憲法改正論者も「天皇制廃止」について触れようとはし

ないのみならず、国民の中にも、「天皇」はいなくとも良いと言う者はいても、あからさまにこれを言う者はなく運動にはなっていないと言える。憲法で表現の自由が保証されていないながら、これについては表面化されず、議論される事はない。宮内庁の在り方については取り沙汰される事はあっても。

平成20年に中国の副主席が来日した際の「天皇」との会見について宮内庁と政治の側との間に議論にはなったが、「天皇制」そのものについてではない。

こうした古来伝わる「天皇（制）」を土台にした国民性を持つ日本にあって、天下統一を目指し、その確立を常に考えなければならぬ為政者秀吉にとって、キリシタン問題はその本質に関わる最も重要な政治課題であったのである。

「神（々）」に連なる「天皇」とその「天皇」によって権威づけられている関白としての秀吉の立場、それに対して「唯一絶対の神」を信仰するキリシタン（キリスト教徒）とは本質的に相入れない立場にあったのである。

その点では、信長も同じだったと言えるのだが、彼の場合は、未だ、途半ばだったため、その点について思いを至す必要がなかったばかりか、長篠の戦（天正3<75>）で見せた鉄砲の威力に示された西洋の文物を取り入れるため、それをもたらし宣教師達を積極的に受け入れたのである。そこには、日本人の持つ新しい物好きと言う心理も働いていたかも知れない。

しかし、秀吉は天下統一を果たしたため、この問題が統治の最重要事項として浮上、その解決が喫緊の課題となり、「長崎二十六聖人」の処刑に象徴される弾圧策が必要だったのである。

そして、それは、徳川政権に至っても踏襲され、三代将軍徳川家光（慶長9<1604>－慶安4<51>）の時代に「鎖国」と言うより徹底した形を取るのである。

これにより、我が国固有の風俗・習慣、伝統・文化と西洋文明との摩擦の問題は解消するのだった。そして、250年後の「開国」により再び大きな問題として浮上して来るのである。

結

「歴史研究」において「近代化」を「人間（中心）主義」、「合理主義」の発露と捉え、それが「歴史現象」として現れた「大航海時代（地理上の発見）」、「ルネサンス」、「宗教改革」を以て「近代化」の始まりとするのだが、そこには、常に、「唯一絶対の神」が存在し、それは、時に、「人間（中心）主義」、「合理主義」とは背反する側面を見せるのだった。

従って、「人間」はこれと如何に兼ね合う事でその「生きる」を考えて来たと言える。時に融合し、また、抵抗しながら「時」の変遷、「時間」が経過し「歴史」が形づくられて来たのである。

建国伝説に繋がる「神（々）」を祖とし、中国、朝鮮から伝えられた儒教や仏教と深く関わる事になった「天皇」の存在が、「天皇親政」の時も、時々の為政者（権力者）もこの「天皇」の存在と権威を背景としていたところに我が日本の大本をなしていると言える。

14

そこに、深く「神」に帰依したザビエルに代表される「紅毛・南蛮人」によって西洋文明がもたらされ、「人間（中心）主義」、「合理主義」が導入される事になったわけである。従って、「神」の存在が常に根底にある「西洋」と強弱の差はあれ「天皇」が国の基として存在する日本とでは、本質的に相入れないものがあつたと言わざるを得ず、そうした背景を持った「歴史」の諸相が、我が国における「近代化」の始まりと言って良く、両者の具体的葛藤が「歴史現象」として現れる事になるのである。

注 (参考文献)

- (1) ①神川正彦『歴史における言葉と論理』Ⅰ・Ⅱ 勁草書房 1978
②吉田悟郎『歴史認識と世界史の論理』 勁草書房 昭和54
③齊藤孝『歴史と歴史学』 東京大学出版会
④コリングウッド 小松茂夫・三浦修共訳『歴史の観念』 紀伊國屋書店 1970
⑤ブルンナー 石井・石川・小倉・成瀬・平城・村上・山田訳『ヨーロッパその歴史と精神』 岩波書店 昭和50
- (2) 青木一夫訳『全訳 マルコ・ポーロ東方見聞録』 歴史書懇話会 1997
- (3) ①コロン 吉井善作訳『コロンブス提督伝』 朝日新聞社 1992
②モリスン 荒このみ訳『大航海者コロンブス』(大航海者の世界Ⅰ) 原書房 1992
- (4) 増田義郎『マゼラン地球をひとつにした男』(大航海者の世界Ⅲ) 原書房 1993
- (5) ペンローズ 荒尾克己訳『夢と冒険の二世紀』 筑摩書房 1985
- (6) ①ヴァザーリ 平川・小谷・田中訳『ルネサンス画人伝』 白水社 1984
②ヴァザーリ 上田・石橋・日高・小佐野・篠塚・上村・佐藤・越川訳『ルネサンス彫刻家建築家列伝』 白水社 1989
- (7) オヴェット 大久保昭男訳『ボッカッチョ評伝』 新評論 1994
- (8) ガセット、マタイス 佐々木孝訳『ガリレオをめぐる』 法政大学出版局 1969
- (9) 小出正吾『宗教革命者マルチン・ルッター』 審美社 1967
- (10) ゲルツ 田中真造・藤井潤訳『トーマス・ミュンツァー 神秘主義者・黙示録的終末預言者・革命家』 教文館 1995
- (11) ①マントウ 徳増・井上・遠藤訳『産業革命』 東洋経済 昭和53
②大河内曉男『産業革命期経営史研究』 岩波書店 1978
③武居良明『産業革命と小経営の終焉』 未来社 1971
- (12) ①高橋裕史『イエズス会の世界戦略』 講談社 2006
②宮崎正勝『ザビエルの海 ポルトガル「海の帝国」と日本』 原書房 2007
③徳永恂・小岸昭『インド・ユダヤ人の光と闇』 新曜社 2005
④古川薫『ザビエルの謎』 文春文庫 1997
⑤加賀乙彦『ザビエルとその弟子』 講談社文庫 2008
- (13) ①大類伸『キリシタン運動の時代』—日本学士院所蔵キリシタン史料について—
②井上章一『キリスト教と日本人』 講談社現代新書 2001
③結城了悟『イルマン キリシタン時代のイエズス会修道士』 日本二十六聖人記念館 2001
- (14) フロイス 松田毅一・川崎桃太訳『日本史』1～12 中公文庫 2000
- (15) ①若桑みどり『クアトロ・ラガッツィ 天正少年使節と世界帝国』 集英社 2003
②泉井久之助・長沢信寿・三谷昇二・角南一郎訳『デ・サンデ天正遣欧使節記』 新 15
異国叢書 雄松堂出版 平成14
- (16) ①松田毅一『新装版 豊臣秀吉と南蛮人』 朝文社 2001
②山本博文『天下人の一級史料 秀吉文書の真実』 柏書房

(受理 平成22年1月9日)